

「巣立ちの季節」

岩手県立盛岡第三高等学校 2年

三浦 麻名

静寂。眼前には、深い緑が広がっている。私は、父と姉の二人と手をつないだまま樹の陰に座り、息を殺して辺りの暗がりを目を凝らしていた。すると、月の光を遮るように、高く、はるか頭上に、羽を持った何かが横切っていったのに気付いた。

「おとうさん、おそらになにか、とんでいったよ」

私は、父の耳にめいっばい顔を寄せて囁いた。

「あれはね、フクロウさんだよ。彼らは、お父さんたちの大切なりんごの樹を守ってくれてるんだ」

囁き返してきた父の声が私の耳をくすぐる。夜の闇を切り裂いて、音もなく急降下してくるそれは、幼い私の目になんと凜々しく、そしてなんと神々しく映ったことだろう。分厚い雲さえ切り裂けそうなその翼に、どれだけの憧れを抱いたことだろう。私は傍らで、同じように呆けた顔で空を見上げている姉に話しかけた。

「きれいだね」

辺りは変わらず、深い静寂に包まれている。

湿ったにおいだ。自らの茶碗にご飯をよそいながら、私はふとそう感じた。ここ数日、灰色の空が続いている。そのせいで、湿っぽい雨の香りが台所にも染み付いてしまっているのだ。雨がぱらぱらと降ったり、時々思い出したように雲が途切れたり、でもまた元に戻ったり。せつかく北国に春が訪れたというのに、これでは手放しで喜べない。釜のふたをゆるゆると戻し、食事の席に着く。

「おお、起きてたか、まい」

廊下の先から父と祖父が連れ立って現れた。父は私の姿を認めると、にこっと笑って挨拶してくれた。いつも通りのちょっぴり気の弱そうな笑顔だ。

「なんだか、毎日ぱっとしない天気だね」

私がそう話しかけると、父の笑顔に若干の影が落ちた。仕事服にはねた暗い泥の跡が、私の目に飛び込んでくる。

「そうなんだよ。どうやら、今年は近年になく長雨の年らしい」

父の眉がきゅっと下がった。我が家は代々続くりんご農家なのだ。りんごはこの時期に、暖かい日光をたっぷり浴びるからこそ美味しく育つ。連日こんな天候が続くのは、りんご農家にとって死活問題だった。窓の外に目を向けると、木の葉の緑が心なしかくすんで見えた。とても麗らかな春の緑とは思えない。

「日照時間が短いと、りんごの美味しさが落ちちまうぞ。今のうちになんとかせんと、今年りんごはまずくなっちゃうかもな」

後ろから、追い討ちをかけるように祖父の声が響き、父はますます両の眉を下げた。

「俺にはただ雨が上がってくれるように祈ることしか出来ないよ。なあ父さん、どうすれば良い？」

「気休めでも今出来る対策をするしかないだろう。とにかく、今のこの農園の責任者はお前なんだ。お前がしっかり指揮を執らないでどうする」

頭が痛い、というように祖父は白い頭を振った。

一家の大黒柱でありながら、しばしば父は頼りなくなる。祖父から父へ農園の引継ぎが行われたのはごく最近のことだ。そのためもあるのだろうが、優柔不断な父の様子を見るたびに、父にはまだまだ自信が足りていないと娘ながらに感じてしまう。娘の憂いに気付かない父は、それ以上天候について口にする事なく、がらりと話題を変えた。

「ところで、まいは今からご飯か？ りんご農家を継ぐんだったら、もう少し早起き出来るようにならなくちゃな」

あくまで優しくたしなめられて、私は少し反省する。りんご農家の朝は早い。早いということは知っているけれど、実のところ、私は父たちがいつから起きているのか正確な時刻は知らない。皆が早朝、忙しく立ち働いている音を夢うつつに聞きながら、一番遅く起きてくるのが私だ。階下に行けばすでに湯気を立てた朝食が用意されている。今日もそれにありがたく手を合わせて、私は箸を取った。

「なあ、まい。まいは本当に、この家を継いでも良いと思ってるのか？ なんせお前はまだ高校生なんだ。夢が他にできたら、じいちゃんはいつでも」

「やだなあ、父さん。まいはこの前だって、自分がりんご農家の後継ぎになるって言うてくれてたんだ。期待の後継者って決まってるんだよ」

祖父の言葉を遮って、父は私に笑いかける。りんご農園の後継ぎうんぬんの話になると、父は決まって早口になる。まるで何かを恐れているかのようだ。私に何か明確な夢があるのなら、自分の将来を断定されるような口ぶりに怒りを覚えたりするのだろうが、私は譲れないような夢など持っていない。

「うん、私はこの家を継ごうと思ってるよ。だって、他に夢もないし」

私の言葉を聞いた父の顔には、あからさまな安堵が浮かんでいた。人に夢を聞かれても、りんご農家を継ぎたいと答えると、簡単に納得してもらえる。継げる家業があるというのは楽なことだ。この家業がなかったら、今頃の私はとりあえず答えられる夢もなくて、途方に暮れていたことだろう。私はきっとこれからも、逃げ道のようなこの夢をなあなあと掲げ続けていく。そう思っていた。

「分かった、まい。でもな、自分の夢は、できるかぎり自分で見つけるんだぞ」
絞り出したような祖父の声は、何となく私の心の隅に引っかかって消えていかなかった。

外には生ぬるい風が吹いていた。りんご畑の入り口に立ち、開放的な敷地を見つめる。私は皆を手伝うため、家のすぐ前にある畑に来ていた。りんご畑の空は広い。町の空をばらばらに区切っている電線もここにはないし、りんごの木もそれほどの高さはないためだ。この広大な畑はもうじき一面の白いりんごの花で埋め尽くされることになる。

春のりんご農家は忙しい。いや、実のところ一年中休む暇はほとんどないのだが、りんごの花が咲く時期になると一気にやるが増えて、仕事を父と祖父だけでさばくのは少々辛いものがある。普段まだ家で寝ているはずの私も、毎年この時期はりんご畑に出向き、作業の手伝いをするように言われていた。

「今月の仕事はもっぱら、肥料の散布と剪定だな。五月になったら、大急ぎで摘花の作業に入らなきゃいかん」

余分な花を摘み取る「摘花」という作業が、この時期の一番の大仕事である。可憐な花が非情にも地面に投げ捨てられていくのは、正直見るに忍びない。だが、栄養の分散を防いで美味しいりんごを作るためには、仕方のないことだ。今年の摘花は、去年までに比べて一層大変だ。毎年作業が忙しい時期になるとひょっこり手伝いに来てくれる姉が、今年はまだやって来ていないからである。

歳の離れた姉は、茶色い髪を短くそろえ、自由奔放な性格。長年の夢だった野生動物のカメラマンとなり、この近くで仕事をしている。家業を継ぐのは姉でも良かったはずだが、姉はりんご農家には何がなんでもなりたくないと言う。もともと、「あわよくば世界に飛び出したい」、「インドでゾウの子を手懐けたい」というのが口癖の姉であったから、父も端からあまり期待してはいなかったようだが。私は地面に落ちた枝をせっせと拾う。枝拾いというと雑用のようだが、りんごの樹を齧るネズミの隠れ場所をなくすための、立派な仕事なのだ。

地面から顔を上げて、りんご畑の広い空を仰ぐ。私がこの時期毎日りんご畑を訪れるのは、家業の手伝いをして将来のために役立てようとか、そういう立派な目的のためばかりではない。私の意識はもっぱら、りんごの樹に隠れるように設置された、白い大きな箱に向いていた。

それは巣箱だった。りんごの花が咲く頃は、ちょうどフクロウの雛が育つ時期でもある。私がおこに通うのは、フクロウの雛をなんとかしてでも一目見てみたいという己の密かな願望を叶えるためでもあった。フクロウは、りんごの樹にとって害獣であるネズミを狩る益鳥なのだという。数年前に父が巣箱を抱えて畑に現れた時は、子供一人すっぽり入れそうなその大きさにまず驚き、ここにフクロ

ウが住むのだと言われたときは、家族全員が腰を抜かしそうになった。

「昔は、巣箱なんてなくても彼らは畑に来てくれたんだけど」

そう言って父は、巣になる樹の洞が伐採されて数を減らしているフクロウのことと、農園内に巣箱を掛ける取り組みがりんご農家で広まっていることを教えてくれた。巣箱を掛けてもすぐにフクロウが使ってくれる訳ではなく、私はいまだに雛をこの目で見る事が出来ないでいる。今年は畑の入り口に近い巣箱に親フクロウが出入りしているという話を聞いて、私は念願を叶えるのは今だと浮き足立っていた。

ところが、一つ気がかりなことがある。雛の気配が全く感じられないのだ。私は、静かに辺りを見回した。辺りは不気味なほどに静まりかえっている。私は物置付近に置かれていた脚立を持った。そして巣箱の方に一歩ずつ、歩みを進める。

「巣箱に雛がいるときは、あまり近付かないように。驚かせるといけないだろうからな」

父の声が脳裏をかすめる。わざわざ忠告されなくても、今日までそんな事をしようとは思ってもみなかったのだ。私はまた一歩、巣箱に近づいた。

もし、中で雛が死んでしまっていたら、どうしよう？

微かにも音をたてない大きな箱を見て心配になった。そうだ、私が巣箱に近づいているのは、雛たちが本当に生きているのか確かめたいからだ。少しだけ、中を見るだけで良い。

ついに巣箱の前に着いた。どきどきした。かなり高い位置にある巣箱を見据え、意を決して脚立の一段目に足をかける。普段の作業で脚立を使うこともたまにあるから、登ること自体にはそんなに恐怖を感じない。穴はもうすぐそこだ。首を伸ばして中を覗くと、白っぽい塊がそこにいた。

生きている。二羽の雛が重なり合うようにして、箱の底にうずくまっているのが見えた。思い描いていたような気高い猛禽の像とは似ても似つかず、私は拍子抜けした。雛は灰色と白が混ざったまだら模様にはぼんやりとした顔、毛はぼさぼさで、まるでぼろ雑巾のようだ。しかし、それがかえって愛らしい。毒気を抜かれるようなその無防備な姿に、きゅうっと心をつかまれたような気がした。

気が抜けた心地でいると、妙な方向に力が入って、脚立がぎしっと低い音をたてた。私は慌てて体勢を立て直したが、雛たちはぶるりと身体を震わせてこちらを見る。初めて目が合った。

瞬間、先程までとは打って変わって、雛たちは鋭い雰囲気を放ち始めた。私を見上げる視線が、心なしかキツとしたように感じる。一羽がこちらに向かって首を伸ばした。何をするつもりなのかと身構えたが、雛はこちらの顔をじっと見つめ、カチツという音を立てただけだった。最初は雛がクチバシを鳴らしているのだ

とは分からなかった。何をしているのだろう。私は首をかしげた。

「まい！ 戻ってきなさい！」

鋭く、でも抑えた声が飛んできたのはその時だった。

私は慌てて後ろを振り返った。遠くのりんごの樹の陰で、見知った顔が手招きしている。

「分かったよ、お姉ちゃん」

私は観念して、ゆらゆらと足場を下りた。

「まったく。今日も巣箱見てるの？」

あれから数日後。私はもう一度雛をこの眼で見ようと躍起になっていた。理由は単純だ。雛の姿が見られたわずかな瞬間、私はあのもこもこした生き物の愛らしさに心を奪われてしまったからである。あの後、私は呆れた表情の姉に説教を食らった。

「巣箱に必要以上に近付いちや駄目、中を覗くなんてもっての外。いつ親鳥が戻ってくるか分からないんだから！」

野生動物を相手にする仕事に就き、動物保護団体のボランティアもしている姉の言葉は重い。私はうなだれるしかなかった。

「この巣は危険だって判断したら、子供を捨てて逃げちゃう親鳥もいるのよ。雛だって怖がってたでしょう？」

「カチッてクチバシを鳴らす以外、何もしてこなかったけど……」

私の何気ない言葉に、姉はますますまなじりを吊り上げる。

「それ、フクロウの威嚇よ」

初めて知る事実だった。姉は私に、これからは巣箱から十分な距離を取り、間違っても親鳥が巣箱の近くにいるときに彼らの視界に入らないようにと言いつつ含めたのだった。

姉はやはり、作業を手伝うためにこの家に帰ってきてくれたようだ。姉にどうしてももう一度雛を見たいと言うと、彼女はフクロウの雛について色々な情報を授けてくれた。雛をこの位置から見ようとするならば、チャンスは巣立ちのときらしい。フクロウの巣立ちには雛はまだ飛べない状態で行われる。飛べるようになるまで、雛は親鳥に餌を運んでもらいながら、巣箱の周辺で過ごす。その期間を狙えというのだ。私は言いつけを守りつつ、実に粘り強く観察を続けていた。

「そろそろ巣立ちしてもおかしくない頃じゃない？」

私は姉にそう話を振った。姉は、うーんと腕を組みつつそれに答える。

「ひょっとしたらもう巣立ちちゃったのかも。うちらも一日中巣箱を見てるわけじゃないし」

巣立ちの瞬間を見逃したとすれば惜しいけれど、ありえない話ではない。仮に

そうだとすると雛はまだこの周辺にいるはずだ。

辺りのりんごの樹を見ると、だいぶ花のつぼみが膨らんでいた。りんごの花は、つぼみの状態だと可愛らしい薄桃色をしているけれど、花が開くと徐々に色が消え、最後には純白になる。その変化も見ていて美しい。今年もりんごの花が美しく咲くように、畑の風景を眺めつつ祈っていると、黒い物体が視界の端で動いているのに気がついた。姉の服の袖を引っ張る。

「ねえ、あれ」

姉も異常に気がついたようだ。

「何であんな所にカラスが？」

数羽のカラスが集まって、何事か騒ぎ立てている。嫌な予感がして、私たちはカラスらが飛び回っている方へ向かった。

先陣を切って近付いていった姉がはっと息をのむ。私は姉の視線の先を追った。薄汚れた白と灰色のまだら模様が、地面にへたり込んでいる。地面がゆるく泥になっているせいか、汚れが増え、より一層ぼろ雑巾のような印象が強まっている。フクロウの雛がカラスに攻撃されているのだ。

「はっきりとした理由は分かっていないのだけれど、カラスの猛禽類に対する敵対心は、相当なものよ。とりわけフクロウに関しては過剰反応と言っても良いくらいだわ」

姉はこの状況にカメラを構えながら、冷静に説明してくれた。殺気立ったカラスたちの様子は、人間が見ていても恐ろしい。何羽かで無防備な雛を囲み、じりじりと距離を詰めていく彼らの様子には、鬼気迫るものがあった。双方に息苦しいような緊張が満ちるなか、私は、ただ固唾を呑んでその状況を見ていることしか出来ない。戦況は大いにカラスのほうに優勢だった。何しろ雛はこんな状況でもまだぼんやりとした顔をして、ただ攻撃の波が収まるのを待っているだけなのだ。

そのとき、上空から凄まじい勢いで親鳥が下りてくるのが見えた。カラスは予想外の反撃に驚き、散り散りになって逃げ出した。単身で現れたのにもかかわらず、何という強さ、頼もしさだろう。それに引き換え雛は、親鳥の背中にじっと隠れて、ただ嵐の過ぎ去るのを待っているだけ。その姿にどこか見覚えがあった。

「良かった、カラスは去ったみたい」

安堵して溜め息を漏らす姉が、こちらを振り返った。りんごの樹に隠れるようにして息を殺していた私を見て、愉快そうに笑う。

「そんなに怖がらなくてもいいのに。野性ではあんなの日常茶飯事よ」

残念ながら私が怖がっているのは、そのことばかりではない。私は気付いてしまった。

そうだ、あれは私だ。常に誰かの陰に隠れ、自立できない私とフクロウの雛は似

ている。そのことに何故自分がこんなに動揺しているのかは分からないが、とにかくこのままではまずいような感じがした。数日前の朝、自分の未来は自分で考えると、祖父に言われたからかもしれない。自分の未来でも見ているような頼りない父親の様子や、活発な姉の姿を見たからかもしれない。雛を通して見る守られてばかりの自分の姿は頼りなくて、薄汚れていて、随分ちっぽけに見えた。

あれからまた数日が経った。空の色は朝から一際暗く、昼を過ぎ、空から堪え切れなかったというように一滴水が落ちてからは、あっという間に本降りの雨となった。ここ一番の大雨を警告する気象予報士の声に、私は今日の巣箱の観察を諦めることを決めた。

あの巣箱にはまだ雛の片割れが残っているようで、私は相変わらず畑で巣箱を眺める日々を続けている。カラスの一件があってから、雛を見守る私の心境は親近感ともどかしさが半分ずつの、少し複雑なものに変化してしまったように思う。今まで可愛いと愛でているだけだった雛の姿が、急に自立できていない自分と重なって見えてしまったからだ。考えれば考えるほど自分の頭の中にまでどす黒い波紋が広がっていくようで、気が滅入った。

居間には珍しく、父と姉の二人だけがいた。

「結構な雨が降ってるけど、雛は大丈夫かな」

自然とそんな言葉が口をついで出ていた。二人の視線がぱっとこちらに向けられる。私はどぎまぎしながら弁解した。

「あ、ごめん、独り言だよ」

姉は驚いたような呆れたような、でも何とも言えぬ優しい表情でしばらくこちらを見ていた。そして、驚くべきことをさりりとやってのけたのだ。

「まい、そんなにフクロウが好きなら、私みたいに動物に関わる仕事に就く気はないの？ 自分の将来、もう一度よく考えてみなよ」

今までに考えたこともなかった選択肢だった。姉のように、カメラの中にフクロウの雛の様子を収める自分の姿を想像してみる。確かにそれは、もの言わぬりんごの樹と睨み合って年中を過ごす生活よりも、はるかに愉しく魅力的なもののように思えた。

しかし、ここにはそれを良しとしない人物がいた。

「何言ってるんだ、まいはこのりんご農園の希望の星だぞ。まいがこの仕事を継がなかったら、誰がこの畑を守るっていうんだ」

父は例によって早口で姉の言葉を非難した。父がこのように語気を荒げるのは珍しいことだが、姉はむしろ受けて立つといった様子で、全く怯む気配がない。

「お父さん、前から言おうと思ってたんだけど、娘の人生に口出しするのは止めた方がいいと思う。農園の後継者がいなくなるのが心配なの？ それとも、そん

なに娘を家に置いておきたいわけ？」

「まいは自分でりんご農家を継ぎたいって言うてくれてるんだ、押し付けてるわけじゃない。お前は好きな仕事に就いて、好き勝手にやっているから良いだろうけど、お前もまいの人生に口出しすべきじゃないだろ」

この父の言葉に、姉はがたと激しく音をたてて立ち上がった。顔色が変わった姉は、言葉を荒げて一気にまくしたてる。

「十分、押し付けてるわよ！ 一度でも、心から娘の夢について決め付け無しで聞いてあげようとしたことがある？ 一人でいるのが不安で、頼りない父親だからって、娘の夢を縛り付けないでよ！」

「今俺のことは関係ないだろう！」

歯止めが利かなくなる二人の会話を聞きながら私は、姉はもしかして自分の夢について父にきちんと話を聞いてもらうことが出来なかったのではないか、とぼんやりと考えた。父に自分の夢を認めてもらえないという悲しさが、彼女の発言の根底には含まれている気がする。

突然姉がきつとこちらを向いた。本当のところあなたはどう思ってるの、と問いたげな目だ。父も私の方を見た。助けてくれ、と懇願するような目だった。二人の間で板ばさみになるのは、苦しい。助けてもらいたいのはこちらの方だ。

「ちょっとまい、どこいくの！」

私はなおも言い争う二人を置いて、勢いよく自室のベッドに飛び込んだ。部屋は静かで、扉を固く閉ざすと、私は雨の音に包まれた。どうしてこんなことになってしまったんだろう。私はぎゅっと瞼を結んで、地に叩きつける雨の音だけを聞いていた。

どれくらい時間が経っただろう。耳を澄ましても、雨の音は聞こえなくなっていた。目を閉じてそのまま少し眠っていたのかもしれない。おそらく、家の中の雰囲気は最悪だろう。私の足はそっと居間の戸の前を通り過ぎ、自然に外の畑へと向かっていた。日が落ちたりんご畑は暗かったが、りんごの花がいくつか咲いているのは確認できる。こんなのもうたくさんだ。私は、地面に落ちていた可憐な花の一つを踏みつけて歩いた。小さな花は泥にまみれた。やるせなくて仕方がなかった。暗い畑を俯きつつ歩いていた私は今初めて、りんご畑に先客が居ることに気が付いた。その人物は静かに畑に佇んで、一心にカメラのファインダーを見つめている。

「あれ、まい、いたの」

そうやって姉は僅かに笑った。私は何を話すべきか分からず、無言で姉の隣に並ぶ。カメラを見つめる私の視線に気付いたのか、姉はファインダーから目を離し、黒光りするそれをちょっと持ち上げてみせた。

「外で頭を冷やそうと思って、気分転換にね。そうだまい、カメラ持ってみる？」

言われるがまま、私は両の手をおずおずと差し出してそれを受け取った。ずっしりとした重さに手が沈む。似合うよ、と姉が褒めてくれるのが少し照れくさかった。

「ありがと、お姉ちゃん」

うつむきがちにお礼を言ったときだ。フクロウのものと思われる鳴き声の一つ聞こえた。慌てて声のした方向に目を向ける。

「うそ……」

カラスが何羽か、いつか見たような構図で集まって鳴き交わしている。そして中心にいたのは紛れもなく、カラスに襲われても無抵抗だったかつてのか弱い雛だった。しかし、前回と違っていたことが一つある。なんと雛はカラスより優勢に見えたのだ。威嚇するように身体を大きく見せたり、たまに反撃を試みたりする。あの出来事から僅か数日しか経っていないのに、この成長のしようはどうだ。カラスはとうとう遠巻きに雛を睨み付けるのみとなった。雛はふわりと上空に飛び上がり、優雅にりんごの枝の上に着地した。もう飛べるようになったのだ。

私たちは、お互い呆けたような顔をして、りんご畑の広大な土地に残されていた。フクロウの雛の自立はあんなにも早い。その事実呆気に取られながら、私は、勝ち誇ったように枝の上にふんぞり返る雛にピントを合わせた。カチリ、と軽い音がして、雛の姿が画像に収まる。なんだか自分も負けていられないような気がした。ほんの小さな頃から、威嚇したり自分の意思で飛んだりしているのだ。あんなぼろ雑巾みたいだった雛にさえ出来るのだから、私だってきっと自分の力で歩いてゆける。

私の夢は一体何だろう。覗いた中にヒントがある気がして、私は、撮ったばかりの雛の写真をじっと見つめた。そこには見慣れた風景が広がっている。フクロウと、りんごの樹。思えば幼いころからずっと目にし続けてきた光景だった。そして、これからもずっと目にし続けていたい光景でもある。私は目を見張った。

「お姉ちゃん、カメラ貸してくれてありがとう」

今度ははっきりと、姉の目を見つめながらお礼を言う。同時にあとほんの少しだけカメラを借りることを許してもらった。私は晴れ晴れとした気分で、りんごの花がほころぶ畑を後にした。

明るく日の朝、私はそそくさと作業に出ようとしていた父を呼び止め、その眼前に立ちはだかった。父は落ち着かなさそうに、自分の手とりんご畑の双方に忙しく視線を彷徨わせていたが、私が手に持っているものが何であるか気付くと、どきりとした表情になった。

「お父さん、見て欲しいものがあるの」

私が持っていたのは、昨日撮ったものも含めた、数枚のフクロウの写真だった。どれも姉のカメラから昨日のうちに焼いておいたものだ。

「まいも、やっぱり写真家になりたいのか？」

うなだれたように父が言った言葉を、しかし私はきっぱりと否定する。

「違うよ。私が見て欲しいのは写真そのものじゃなくて、写真の中にあるの」

私は、フクロウの雛とりんごの樹が一枚に収まった写真を、父の目の前に示した。さらに、そこにもう一枚写真を重ねる。それは姉が撮ったもので、カラスに怯える雛と、それを守る親鳥が映っていた。

「最初の写真は、今年生まれの雛が、カラスを自力で追い払ったあとに撮ったものなんだ。でも、ちょっと前までは、もう一枚の写真みたいに親鳥に守ってもらわないと何も出来ないような子供だった。お父さんはこんな風に、親として私をしっかり守ってくれてる。それには本当に感謝してるよ」

父の表情をちらりと伺った。私がいつになくはっきりとものを言うことに、随分驚いているように見える。

「でも、雛みたいに強くなるためには、いつかは巣立たなくちゃいけないんだ。

私はもう十分守ってもらったから、自分の夢は自分で決める」

父は写真を凝視している。そして神妙に、ぽつりと言った。

「カッコいいな。この雛」

私はここで、深く息を吸い込んだ。

「私、りんご農家になりたい」

一瞬の沈黙があって、きょとん、とした表情の父が見えた。いつかの雛の顔を思い出す。

「私は子供の頃から、りんごの樹がどこまでも広がっていて、フクロウが人と程よい距離感でのびのび生活してる、そんな景色の中で育ってきたんだ。私はりんごも好きだし、フクロウも好き。こんな景色をずっと守っていけるような、りんご農家になれたらいいと思うの」

父の顔に、見る見るうちに満面の笑顔が広がった。明るい日差しを受けて、りんご畑のあちこちで白い花が輝いているのが見える。昨日の水たまりはもうなくなっていた。抜けるような青空に、りんごの花の白が映えている。

静寂。満開に咲いたりんごの白い花は、闇の中でも光を放っているように見える。私と父、それから姉。三人は夜のりんご畑の中に腰掛けて、夜空を眺めていた。

「昔もこんな風に、空を眺めたことがあったなあ」

感慨深げに父が言う。私も、初めてこの畑でフクロウを目にした夜のことを思い出していた。思えばあの時からずっと、フクロウに憧れる気持ちは変わってなかったのだ。

「私はずっと覚えてたわよ。だってあのことがあったから、私はフクロウに憧れてカメラマンを目指すようになったんだから」

私は、初めて姉の口から語られた話に驚くのと同時に、こういうところが似てしまうとはさすが姉妹なだけある、と妙に納得してしまった。父はわざとらしい咳払いをして、そうか、とか初耳だ、などともごもご言っていたが、「今まで仕事の話をちゃんと聞けてなくて、悪かった。たまにはうちに帰って来て、フクロウでも撮っていくといい」と、きっぱりと言い切った。

姉はちょっと目を見開いて、それから花が咲いたように笑った。私はあることに気が付いて、二人の袖を引いた。

「二人とも、空に何か飛んでる」

りんごの木の上に二羽のフクロウが寄り添って止まった。ふわふわの羽の具合からして、今年生まれの雛らしいと分かる。

静かな月の夜に、その二つのシルエットが、いつまでも浮かんでいた。